

## 能における演者の目

—能伝書に見られる「目遣い」を通して—

原 郁 子

能の演者の目は能面によって視界を狭められているばかりでなく、眼球を動かさないという非日常的な状態に置かれている。<sup>(1)</sup>物を見る型をする場合には目で見るのではなく面全体で見る「面遣い」をするが、現実感を無くし夢幻的な境地に達するためだとも言われている。<sup>(2)</sup>しかし、世阿弥の伝書に当時リアリズム的とも呼び得る目の演技、「目遣い」があったことが記されており<sup>(3)</sup>、かつての能では、目の演技が重視されていたのではないかと推察される。本研究では、小田幸子氏の型付の研究<sup>(4)</sup>を参考に、演技・演出の変革期にあたる世阿弥以降慶長前後までの時期に行われていた演者の「目遣い」について考察を試みる。

(研究方法)

世阿弥の伝書「拾玉得花」「申楽談儀」における演技的側面から見た演者の目遣いに関する記述を参考に、変革期の伝書における目遣いに関する記述を検討し、どのような目の演技が行われていたかを明らかにするとともに、目の演技の変遷の経緯をたどる手掛かりとする。能大成期から江戸期の固定期にいたるまでの能の変貌の様相や過程を知る資料として以下の伝書を参照する。永正十年(1513)前後の成立と認められる金春禪鳳の「禪鳳雑談」、慶長十五年(1610)の奥書のある金春安照の「金春安照能伝書」、そして慶長年間には刊行されており、観世方に所属していたらしく、かつ金春方たちとも交渉の深かったものが著したとされる<sup>(5)</sup>「八帖花伝書」の三伝書である。

(考察)

### 1. 伝書に見られる演者の目

伝書に見られる演技的側面から見た演者の目に関する記述を以下のように分類し、考察を試みた。

(1)詞章の内容に即した目遣い

①対象との関係を表す視線

「申楽談儀」「禪鳳雑談」には優れた目の演技を賞賛する記述があるだけであるのに対し、「金春安照能伝書」では詞章を挙げ、「八帖花伝書」は花、恋慕の人といった対象を挙げ、具体的にある決まった演技があることを示す。対象との関係として、空間の広がりを表す空間を演出する視線、対象への想いを表す感情を表す視線、体の方向を示す補助的な動きを表すに大別される。

②対象そのものを見る視線

「申楽談儀」では謡の句毎に「見はたらきをすべし」と述べているだけで具体的な説明はないが、「禪鳳雑談」以後、視線に関する記述が増え、謡のどこで何を(又はどの方向を)見るかといった非常に具体性に富む記述となり、演技全体の中で視線が重視されていたことが分かる。また、安照

は「見る」ことと面を動かすことを区別して記述しており、視線と面を動かすことによる表情の変化を分けて考えていること、当時から今日の能に見られる「照らす」という動きがあったことが分かる。

(2)役柄を表す目

世阿弥は老人の演技における目の持ち様を「開心遠目」としたが、「禪鳳雑談」では天女の舞のときの目の持ち様が記されている。また「八帖花伝書」では、鬼神、人、女の「目遣ひ」は異なると記してあり、いずれの伝書にも役柄によって目の持ち方、遣い方を変えようという考えが見られる。

(3)舞のときの目遣い

舞のときの目遣いとして自分の手先を見るという身体意識を表すものと、周りの空間を見ることは世阿弥、禪鳳が記しており、空間意識は禪鳳が目遣いのことは触れずに記したのと類似する内容が「八帖花伝書」において目遣いの事として記されている。

### 2. 目の演技の重視と「見る型」の減少

世阿弥は「花鏡」において、観客全体の注目を引き込むことを、

万人の見心を為手ひとりの眼精へ引き入るゝと表現し、「申楽談儀」では犬王・観阿弥の芸を賞賛する際、目遣いについて述べており、当時の能の演技では目の演技が重視されていたことが推察される。禪鳳・安照の伝書、「八帖花伝書」の記述は世阿弥の伝書に比べ、より具体化し、記述の量も増えており、特に、「八帖花伝書」では、

能と申すは、目遣ひに帰したる事なり  
と言ひ切り、目遣いに関しては詳述している。

しかし、安照の伝書では、禪鳳の伝書に比べて「見る型」が減少しているが、その原因として小田氏は、「見る型が繁雑を極めたこと、見る型を過度に行わずに舞台的リアリティを実現しようとする意識が強まったこと」を挙げている。<sup>(4)</sup>

### 3. 目遣いの変遷—今日の能への方向性—

1で分類した目づかいの変遷過程を伝書で検討すると、今日の能に「面遣い」として残らなかった目づかいは、ただ減少しただけではなく、扇が視線の代わりとなり、又、視線を動かさずに心をつける、気を配ることへ変容していったと考えられる。

[注] (1)喜多六平太 1924『喜多流独吟兼用仕舞型付上』東京喜多流刊行会(2)桜間道雄 1983『対談八十以後現代申楽談儀』『国文学』第28巻13号(3)石黒節子・酒向治子・原郁子 1995『舞踊と視線—内部への集中—』第41回舞踊学会(4)小田幸子 1987『能の演技と演出—装束付・型付をめぐる諸問題』『能楽研究』第10号(5)中村保雄 1995『「八帖花伝書」解説』日本思想大系古代中世芸術論『芸の思想 道の思想2』岩波書店  
※本文は日本思想大系古代中世芸術論より引用した。